

## 5) 菌類

### ①概説

菌類はより正確には真菌類と呼ばれ、①真核生物である、②基本的な生活体は多細胞の菌糸体である、③細胞は単核または多核性である、④栄養摂取は吸収性である、⑤有性的または無性的に形成された孢子によって増殖する、⑥従属栄養生物である（自ら有機物を生産できない）、などの特徴を合わせ持つ点で、細菌類・放線菌類・変形菌類（粘菌類）・細胞性粘菌類など他の近縁の微生物から区別される。最近の定義によれば菌類はツボカビ・接合菌・子のう菌・担子菌の4門と生活環の一部不明な不完全菌に分類される（杉山, 2005）。

菌類の栄養吸収・生長をつかさどる生活体が菌糸（体）、繁殖・伝播の役割を担うのが孢子、その孢子の形成と分散のための器官が子実体である。子実体の形や大きさは菌類の分類群、さらに菌種によって大きく変わり、肉眼的なものから顕微鏡的なものまでさまざまである。そのうち、子実体が肉眼的にも顕著に認められるものをきのこ（大形菌類）、顕微鏡観察に頼らざるを得ないものをかび（微小菌類）と総称している。ただ、両者の間に明確な区別はない。一般にきのこは担子菌類に多く見られ、また一部子のう菌類にも見られる。

一方、菌類をその栄養摂取様式から腐生菌（死んだ有機物から栄養分をとる）、寄生菌（生きた植物や動物の体から一方的に栄養分をとる）、共生菌（他の生物と互いに栄養分の授受をおこなう）などに区分することもある。あるいはきのこの場合には生態的な見地から、菌根菌（地中で菌糸が生きた植物の根と共生関係をもつもの：バカマツタケ・ホンシメジほか）、木材腐朽菌（菌糸が落枝・倒木・立木の枝幹・根株などの腐敗や腐朽に関与しているもの：シロキツネノサカズキモドキ・シロタモギタケほか）、林内地上生（ホウキタケ・オオズキンカブリほか）、草地生（トガリフカアミガサタケ・ウスムラサキガサ）、地中菌（地中に子実体を生じるもの：イモタケなど）などに分けることがある。いずれにしても、菌類は自然界において生物体あるいは有機物の分解・還元者として重要な役割を果たしている。なかでも、植物由来の有機物の分解・還元過程にもっとも深く関わっている。

本レッドデータブックではきのこ類を対象としており合計70種が選定された。これまで県内から報告されたきのこは約700種と見積もられるので（工藤, 2005；工藤ら, 1998；成田, 1990）、そのおよそ10%にあたる。限られた種数であるがいずれも自然環境の保全・評価上重要な指標になると考えられる。

なお、微小菌類（かび・こうぼ）についてはまだ県内の調査が不十分なため、今回は種選定の対象とされなかった。

（原田幸雄）

②本文

ハラタケ目 キシメジ科

A

和名 ヤチヒロヒダタケ

環境省：絶滅危惧Ⅰ類

学名 *Armillaria ectypa* (Fr. :Fr.) Emel

【形態的特徴】 中～やや大型なカヤタケ型からモリノカレバタケ型のきのこ。傘は淡黄土色で中央に微細な鱗片を密布するが、鱗片の発達が悪く、多少粘性がある。柄にはつばがない。

【選定理由】 本種は湿原などに発生する特異な性質を持っており、世界的に発生がまれで、学術的に極めて貴重なものである。本県では、湿地の減少や休耕田の宅地化など開発による生育環境の悪化で、近年発生が減少してきており、絶滅が危惧される。

【分布と生態の概要】 国内とヨーロッパに分布し、ヨーロッパではアルプスの高山帯や北部高緯度地域の湿原に発生する。日本では群馬県尾瀬から報告されたが (Kobayasi, 1954)、現在、発生が確認されているのは本県と京都府だけである (工藤, 2009)。本県では秋、休耕田のようなヨシなどの茂る湿地や田の畦などに発生する (工藤・長沢, 2003)。

【特記事項】 類似種と同じくつばを欠くナラタケモドキ *A. tabescens* (Scop.) Emelがあるが、こちらは枯木などに生えることと、傘に粘性がないことで区別がつく。

(工藤伸一)

ヒダナシタケ目 サルノコシカケ科

A

和名 コカンバタケ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Piptoporus quercinus* (Schrad. :Fr.) Karst.

【形態的特徴】 枯木などの材に発生する中型の半円形～扇形をした褐色のきのこ。傘の裏は管孔状で白色である。地中に埋もれた基質から発生するものではしばしば極めて大型で円形の傘を形成し、中心に黒褐色の柄をつけることがある。

【選定理由】 国の準絶滅危惧 (NT) に指定されており (環境省, 2007)、本県では1998年に田子町のクリ・ミズナラの天然林内で初めて採取されたが、同地区も含めその後の採集記録はない。

【分布と生態の概要】 本県のほかに静岡県・鳥取県で採取の記録があるとされている (環境省, 2000) が、発生は比較的まれで、分布等の正確な情報は不明である。本県では初秋、ミズナラの枯木上およびクリの根際に発生することが確認されている。

【特記事項】 ヒメカンバタケの別名があり、どちらも和名は「小形」を意味するが、本県から採取されたものでは、極めて大形になることが確認されている。日本産のきのこは学名の基礎となったヨーロッパ産のものと異質の可能性があり、今後分類学的検討が必要である。

(工藤伸一)

**ハラタケ目 キシメジ科****B**

和名 バカマツタケ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Tricholoma bakamatsutake* Hongo

【形態的特徴】 本種は中型のキシメジ型をしたきのこである。傘は栗褐色で周辺部は淡色～ほぼ白色、初め繊維状でのち表皮は裂けて鱗片となる。柄の上部には綿毛状のつばをつける。肉はち密でマツタケ *T. matsutake* (S. Ito et Imai) Sing. に酷似し、特有の香気をもつ。

【選定理由】 本種は環境の良いミズナラ雑木林に広く見られるが、近年の開発によるミズナラ雑木林の伐採や下草の放置などによって発生環境が悪化しており、良好な里山二次林の保存が望まれる。また、本種はマツタケに極めて似ているところから、本県ではマツタケの代用として採取されており、近年の乱獲による環境破壊の影響も著しい。

【分布と生態の概要】 本種は全国的に広く分布するが、発生地はある程度限定され、発生も比較的まれである。本県では初秋、里山のミズナラ・カシワの雑木林内に菌輪をつくって発生する（工藤ら, 1998）が、太平洋側ではほとんど確認されていない。

【特記事項】 本種は本県産標本に基づき新種記載された（本郷, 1974）。（工藤伸一）

**ハラタケ目 テングタケ科****B**

和名 コササクレシロオニタケ

環境省：情報不足

学名 *Amanita squarrosa* Nagasawa et Hongo

【形態的特徴】 本種は小～中型のウラベニガサ型をしたきのこである。全体白色で、傘の表面には柔らかい綿質で破片状～いぼ状の脱落しやすい鱗片を多数付ける。柄は基部が紡錘状に膨らみ、下半部には、反り返ったうろこ状のささくれが輪状につく。つばは綿質、早落性。

【選定理由】 本種の発生がまれで採集記録が1件だけのため分布等の詳細な情報は不明である。今後引き続き調査が必要であるものの、近年のミズナラ雑木林の伐採や雑木林の下草の放置などによって発生環境が悪化しており、良好な里山二次林の保存が望まれる。

【分布と生態の概要】 本種は日本固有種であり発生が全国的にもまれで、本県のほかには滋賀県と鳥取県で発生が知られている（環境省, 2007）。本県では初秋、ミズナラ雑木林内での発生が確認されている（工藤ら, 1998）が、青森市内の郊外で初めて採集された以後は採集記録がない。

【特記事項】 近縁のササクレシロオニタケ *A. cokeri* (Gilb. et Kuhn.) Gilb. form. *roseotincta* Nagasawa et Hongo はより大型のきのこで、傘の中央が褐色を帯びる点で異なる。（工藤伸一）

**ハラタケ目 イグチ科****B**

和名 ヤマドリタケ

環境省：情報不足

学名 *Boletus edulis* Bull. :Fr.

【形態的特徴】 本種は中～極めて大型のイグチ型をしたきのこである。傘は栗褐色で無毛平滑、幼時から湿っているとき多少粘性がある。肉は厚く、緻密で極めて堅い。柄は太くて堅く、表面は淡色で、白色のやや細かい網目模様があるが、下方ではしばしば不明瞭。

【選定理由】 本種は、本県ではエゾマツ林だけから発生が確認されている。本県のエゾマツ林は分布が限定されていることから本種の発生地域も限定されており、発生も比較的まれであることから、環境の変化によっては絶滅が危惧され、保存が望まれる。

【分布と生態の概要】 本種は夏～秋に、針葉樹（主にトウヒ属）の樹下に発生するといわれており、国内では本県以外に北海道から発生が知られている（工藤, 2009）。本県では秋、八甲田のエゾマツ林内の地面に発生する（工藤, 2003）。

【特記事項】 本種に類似した種としてヤマドリタケモドキ *B. reticulatus* Schaeff. のほか数種が存在し、しばしばそれらと混同されている。（工藤伸一）

**ハラタケ目 イグチ科****B**

和名 ドクヤマドリ

環境省：該当なし

学名 *Boletus venenatus* Nagasawa

**[形態的特徴]** 本種は大～極めて大型のイグチ型をしたきのこである。傘は淡黄褐色で初め多少ビロード状を呈するが、のち湿っているとき多少粘性がある。肉に弱い青変性があり、切断すると肉が青く変わる性質がある。柄は汚黄色で赤褐色点状の染みがある。有毒種である。

**[選定理由]** 本種は、本県ではエゾマツ林だけから発生が確認されている。本県のエゾマツ林は分布が限定されていることから本種の発生地域も限定されており、発生も比較的まれであることから、環境の変化によっては絶滅が危惧され、保存が望まれる。

**[分布と生態の概要]** 本種は国内では本州の亜高山地帯及び北海道のエゾマツやトドマツなどの針葉樹の樹下に発生することが知られている (Nagasawa, 1995)。本県では初秋、八甲田に発生する (工藤, 2003) が、今のところエゾマツの樹下以外からは見つかっていない。

**[特記事項]** 本種の形態的特徴の一つとして肉の青変性が挙げられているが、本県産の子実体では肉の青変性は極めて弱い。  
(工藤伸一)

**ヒダナシタケ目 サンゴハリタケ科****B**

和名 フサハリタケ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Creolophus cirrhatus* (Pers. :Fr.) P. Karsten

**[形態的特徴]** 本種は中型のハリタケ型をしたきのこである。傘は貝殻形で、通常数個の子実体が基部で癒着して重なり合う。傘の表面は粗毛状の突起で覆われ、白色～クリーム色、のち淡橙褐色を帯びる。傘裏は比較的長い針状である。

**[選定理由]** 八甲田と奥入瀬の溪畔林内など発生場所が限定されているが、発生がまれな上に近年の温暖化など環境の変化によっては絶滅が危惧されることから、保存が望まれる。

**[分布と生態の概要]** 本種は北ヨーロッパやアメリカ西部などで発生が知られているが、世界的にも分布地域の限定された貴重種である。国内では本県以外ではこれまで北海道・宮城県・栃木県・埼玉県・大分県などで採集されているが、発生はまれである。本県では初秋、沢地帯のブナやサワグルミなどの広葉樹の倒木などに発生する (工藤ら, 1998) が、比較的発生はまれである。

**[特記事項]** 本種は、国内では本県の八甲田から初めて採集された標本に基づいて1990年に日本新産種として報告された (長沢・工藤, 1992)。  
(工藤伸一)

**ヒダナシタケ目 サルノコシカケ科****B**

和名 チョレイマイタケ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Dendropolyporus umbellatus* (Pers. :Fr.) Jülich

**[形態的特徴]** 本種はマイタケ型をした株状のきのこであり、複雑に枝分かれした柄の先端に浅い漏斗形の傘をつけ、大型になる。傘の表面は黄白色～淡きつね色で、黄褐色の鱗片を被り、裏は管孔状で柄に垂生する。柄は白色で、地中の柄の基部にはしばしば黒色、生姜根状の菌核をつくるが、立ち木上から発生し、菌核を形成しないこともある。

**[選定理由]** 本種は発生環境が限定されており、発生が比較的まれな上に、菌核は一旦採集されると子実体の発生が途絶えることから、乱獲による絶滅が危惧される。

**[分布と生態の概要]** 本種はヨーロッパや北アメリカ、中国に分布する北方系の菌であり (今関・本郷, 1989)、国内では北海道や本州中部以北などの冷温帯地域に発生し、ややまれである (工藤, 2009)。本県では秋、ミズナラなどの樹下近くの地中の菌核または立ち木などから発生するが、発生がまれであり採集例は比較的少ない (工藤, 2003)。

**[特記事項]** 菌核を猪苓 (チョレイ) といい、漢方薬に用いられるため採取されている。

(工藤伸一)

菌類



**ヒダナシタケ目 サルノコシカケ科****B**

和名 シロマイタケ

環境省：該当なし

学名 *Grifola albicans* Imaz.

**[形態的特徴]** 本種は大型のマイタケ型をしたきのこである。全体白色で、多数の枝分かれした先に不規則な扇形の傘を生じて大きな株を作る。傘の表面は放射状の繊維紋をあらわし、初めは白～クリーム色、古くなると次第に淡褐色を帯びてくる。傘裏は管孔状。

**[選定理由]** 発生が全国的にまれな上に、発生場所が限定される。本県でも発生は比較的まれで、環境の変化によっては絶滅が危惧され、良好な環境の保存が望まれる。

**[分布と生態の概要]** 本種は下北半島の旧川内町で採取された標本に基づき新種記載され（今関, 1943）、日本特産といわれている。本州以北に分布するといわれているが、採集記録が少なく、たびたびマイタケ *Grifola frondosa* (Dicks:Fr.) S. F. Grayの白色タイプと混同されていることもあり（工藤, 2009）、正確な分布は不明である。本県では秋、ミズナラなどの広葉樹の根際に発生する。

**[特記事項]** マイタケの白色タイプと混同されていることもあり、確実な採集報告は本県からだけである。  
(工藤伸一)

**ヒダナシタケ目 タバコウロコタケ科****B**

和名 カバアナタケ

環境省：情報不足

学名 *Inonotus obliquus* (Ach. ex Pers.) Pilát

**[形態的特徴]** 本種は背着生の大型な多孔菌型をしたきのこである。黄褐色の子実体と黒い菌核からなるが、黒色の菌核が巨塊となって樹幹の樹皮を覆うため、見える部分は菌核部分である。子実体の表面は黄褐色～褐色、堅いコルク質、充実して重い。全面に管孔を密布し、暗褐色。

**[選定理由]** 本種は全国的に分布し、カンバ類の樹木に普通に発生が見られる。本県では一般に採取されてしまうことから、なかなかその存在の確認は容易でなかったが、近年になってようやく正式に記録された。発生環境が基質により限定されているため、環境の変化によっては絶滅が危惧され、また、乱獲による絶滅が危惧されることから、保護が望まれる。

**[分布と生態の概要]** 本種は全国的に分布し、カンバ類の樹木に普通に発生が見られる。本県では夏～秋、主に高山地帯に分布するダケカンバの立ち枯木や倒木上に発生する。

**[特記事項]** 堅くて食用に適さないが、菌核が漢方薬として利用されることから、菌核が採取対象とされているため、見つけるのは容易でない。本種は従来は *Fuscoporia* 属に置かれていた。

(工藤伸一)

**ズキンタケ目 ズキンタケ科****B**

和名 クロムラサキハナビラタケ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Inomidotis irregularis* (Schw.) Durand

**[形態的特徴]** 本種は中型な花びら状をした黒褐色のきのこである。共通の短い柄と、それから発達する多数の花びら状の子囊盤からなる。子実層面は黒褐色で、外面は暗茶褐色、粗面で細粒状。子嚢胞子は長楕円形、側糸は糸状で先端細胞が厚壁ゼラチン質、ロケット形に膨らむ。

**[選定理由]** ブナの朽ちた切り株や倒木上に発生するが、発生基質および発生環境が限定されているため、今後の環境の変化によって絶滅が危惧され、環境の保存が望まれる。

**[分布と生態の概要]** 本種は国内では鳥取県の大山から採集された標本に基づきはじめて報告された（工藤ら, 1994）。国内では鳥取県以外では茨城県で発生が確認されているが、北方系の種と思われる（工藤, 2009）。本県では1997年に初めて十和田市（旧十和田湖町）の溪畔林内で採集され（工藤ら, 1998）、その後、八甲田からも見つかっているが、その他の採集記録はない。

**[特記事項]** 日本新産種。同属のクロハナビラタケ *I. frondosa* (Kobayasi) Korfに類似するが、同種は子嚢胞子が腸詰形、側糸は糸状で先端が鉤状である点で区別がつく。  
(工藤伸一)

菌類

**チャワンタケ目 クロチャワンタケ科****B**

和名 キツネノサカズキ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Galiella japonica* (Yasuda) Otani

**【形態的特徴】** 本種は小～やや中型の黒色椀状のきのこである。短い柄をもち、初め黒色の洋梨形の状態から開いて椀形になり、褐色の子実層面をあらわす。盤の縁はやや深く星形に裂ける。

**【選定理由】** 本種は発生がまれであり、発生環境も限定されているため開発による環境の変化によって絶滅が危惧される。特に、本県で確認されている発生地のうち青森市内の発生地では既に絶滅した可能性があり、今後の環境の変化によっては絶滅が危惧されることから、環境の保存が望まれる。

**【分布と生態の概要】** 本種は日本特産で、岩手県から1918年に発見された標本に基づき新種記載された。その後、60年ぶりに鳥取県、新潟県から相次いで発見され（大谷, 1982）、石川県からも発生が確認されている。本県では晩春～初夏、アカマツ林内の地面に発生する（工藤ら, 1998）。

**【特記事項】** 本県では1991年に青森市内の郊外から初めて採集され、その後平内町からも発見されたが、上記青森市内の発生地では開発により既に絶滅した可能性がある。

(工藤伸一)

**チャワンタケ目 ミガサタケ科****B**

和名 トガリフカアミガサタケ

環境省：情報不足

学名 *Morchella patula* Pers. :Fr. var. *semilibera* (DC. :Fr.) Imai

**【形態的特徴】** 本種は中～やや大型な有柄傘状のきのこである。傘はほぼ卵形で頂端は尖り、下縁部は頭部の中央付近まで柄から離れる（帽子状型）。表面はオリーブ褐色をしており、網目状の隆起で覆われる。網目は縦脈の発達が良好なのに対し横脈は発達悪く縦長で、深さも比較的浅い。柄は円筒形、基部はやや膨大してひだ溝があり、白色～黄土色で粉状である。

**【選定理由】** 本種は全国的に発生が極めてまれであり、本県でも採集例は青森市内の民家の庭から採集された1件だけである（工藤ら, 1998）。発生環境も限定されているため、開発による環境の変化によって絶滅が危惧され、保存が望まれる。

**【分布と生態の概要】** 本種は国内のほかに北アメリカ・ヨーロッパ・オーストラリアに分布し、国内では北海道と本州に分布するといわれている（今関・本郷, 1989）が、採集記録は極めて少ない。本県では、春、肥えた黒土などの上に発生する（工藤ら, 1998）。

**【特記事項】** 本県では上記の採集例が唯一のことから、新たな発生の確認が望まれる。

(工藤伸一)

**ハラタケ目 ヒラタケ科****C****和名 ツバヒラタケ****環境省：情報不足****学名** *Pleurotus dryinus* (Pers. :Fr.) Kummer

本種は大型で厚肉なヒラタケ型をしたきのこである。幼時、傘は淡黄褐灰色で柄に薄い膜質のつばをもつ。本県では秋、溪畔林のハリギリなどの広葉樹の立ち木に生じる（工藤ら, 1998）が、しばしばりんご畑のリンゴの立木に発生することもある。

本種はヒラタケ属*Pleurotus*に所属するが、柄につばをもつという他の種とは異質な特徴がある。国内では本県のほかに北海道・奈良県・広島県での発生が知られているが、全国的に発生は比較的まれである。本県でも発生は比較的まれであり、発生基質及び発生環境が限定されているため、開発による環境の変化によって絶滅が危惧され、環境の保存が望まれる。（工藤伸一）

**ハラタケ目 ヌメリガサ科****C****和名** ダイダイヌメリガサ**環境省：該当なし****学名** *Hygrophorus aureus* (Arrh.) Fr.

本種は小～中型のキシメジ型～カヤタケ型をしたきのこである。傘は橙色で粘液に覆われる。本県では晩秋～初冬、アカマツ林内の地面に発生する（工藤・長沢, 2008）。

本種は国内のほかにヨーロッパなどで発生が知られているが、現在、国内では本県以外から正式な報告はない。この原因としては、発生が比較的まれな上に、類似種と混同されて本種を識別できていない可能性も否定できない。本県では八戸市に発生することが知られているが、開発により環境が変化し、発生が見られなくなっている。発生環境が林相によって限定されており、開発による環境の変化によって絶滅が危惧されることから、環境の保存が望まれる。（工藤伸一）

**ハラタケ目 ヌメリガサ科****C****和名** ウスムラサキガサ**環境省：該当なし****学名** *Hygrocybe canescens* (A. H. Smith et Hesler) P. D. Orton

本種は小～やや中型のカヤタケ型をしたきのこである。全体帯紫淡灰色で、傘の表面はフェルト状をしている。本県では秋、スギ林内のコケ類の生えた草地に発生する（工藤, 2004）。

本種は国内のほかにアメリカ及びヨーロッパ（イギリス・スウェーデン）に分布するが、発生地及び発生環境が限定されているため、採集例が少なく、分布上学的に貴重な種である。国内では、現在本県からのみ発生が知られているが、本県の発生確認地は青森市のスギの植林地内の1か所だけであり、近年、枝払いの枝が堆積するなど環境が悪化してきている。環境の悪化により発生が減少してきており、発生環境が限定されていることから、環境の保存が望まれる。（工藤伸一）

**ハラタケ目 キシメジ科****C****和名** シロタモギタケ**環境省：情報不足****学名** *Hypsizigus ulmarius* (Bull. :Fr.) Redhead

本種は中～大型のキシメジ型～ヒラタケ型をしたきのこである。傘は淡黄褐色で表面は内生繊維状。本県では秋、ハルニレの枯れ木または立ち木に発生する（工藤ら, 1998）。

本種は国内以外ではヨーロッパ及び北アメリカに分布する。国内では本県以外に北海道と鳥取県から報告があるが、従来ブナシメジ*H. marmoreus* (Peck) Bigelowと混同されてきた（長沢・有田, 1988）。発生基質及び発生環境が限定されており、発生もまれである。本県では、発生が確認されているのは五所川原市の防風林および十和田市（旧十和田湖町）の溪畔林の2か所だけからであり、開発により絶滅が危惧されることから環境の保存が望まれる。（工藤伸一）

**ハラタケ目 キシメジ科****C****和名** ツノシメジ**環境省**：該当なし**学名** *Leucopholiota decorosa* (Peck) O. K. Miller, Volk et Bessette

本種は中型のキシメジ型をしたきのこである。傘は褐色で全体ささくれ、特に中央は角状突起に覆われる。本県では秋、ブナの倒木上に発生する（工藤, 2003）。

本種は国内のほかには北アメリカなどに分布し、*Leucopholiota*（ツノシメジ）属の新組み合わせとして発表された（Miller *et al.*, 1996）。国内では1989年に十和田市（旧十和田湖町）から県内で初めて採集された（工藤, 2009）。北方系の種で、国内では本県以外にも、中部地方の山間部で発生が知られているが、比較的まれである。分布上学的に貴重な種であり、開発による環境の変化によって絶滅が危惧されるため、環境の保存が望まれる。（工藤伸一）

**ハラタケ目 キシメジ科****C****和名** オドタケ**環境省**：該当なし**学名** *Clitocybula esculenta* Nagasawa et Redhead

本種は中～大型のモリノカレバタケ型をしたきのこである。傘は粘土色で古くなると黒っぽくなる。柄は長く、束になって生える。本県では秋、ブナ・ミズナラ・ハルニレ・トチノキなどの広葉樹の腐朽材上に発生する（工藤ら, 1998）。

本種は近年、本県産標本に基づき新種報告されたきのこである（Nagasawa & Redhead, 1988）。国内では本県以外に北海道・長野県・栃木県・群馬県など発生地は広範囲に及ぶものの、発生は比較的まれである。発生基質環境が限定されており、発生も比較的まれで、開発による発生環境の変化によって絶滅が危惧され、環境の保存が望まれる。（工藤伸一）

**ハラタケ目 キシメジ科****C****和名** ホシアンズタケ**環境省**：該当なし**学名** *Rhodotus palmatus* (Bull. :Fr.) R. Maire

本種は小～中型のキシメジ型をした全体が淡紅色のきのこである。傘の表面は初め網目状のしわをあらわし、柄に褐色の分泌物を付着する。本県では、春および秋、ハルニレの枯れ木や倒木などの腐朽木上に発生する（工藤ら, 1998）。

本種は1属1種のきのこで、分布上学的に貴重な種である。長く北海道からしか知られていなかったが、近年、本県の五所川原市の防風林と十和田市（旧十和田湖町）の溪畔林で採集された。本県以外にも栃木県・長野県でも見つかっているが、全国的には発生はまれである。発生基質および発生環境が限定されているため環境の変化によって絶滅が危惧され、環境の保存が望まれる。（工藤伸一）

**ハラタケ目 オウギタケ科****C****和名** フサクギタケ**環境省**：該当なし**学名** *Chroogomphus tomentosus* (Murr.) O. K. Miller

本種は小～中型のカヤタケ型をしたきのこである。全体鈍い橙色または黄土色で傘の表面は軟毛で覆われる。本県では、秋、アオモリトドマツの樹下に発生する。

本種はマツ属・モミ属・ツガ属などの針葉樹林に発生し（今関・本郷, 1987）、全国的に分布するものの、発生はややまれであるとされている。本県では八甲田からの採集例が1例あるが、その後の採集報告はない。分布上学的に貴重な種であるが、発生がまれなため採集例が少なく、今後の詳細な調査が必要である。発生環境が林相によって限定されており、開発による環境の変化によって絶滅が危惧され、環境の保存が望まれる。（工藤伸一）

菌類



**ハラタケ目 イグチ科****C**

和名 ヒメヌメリイグチ

環境省：該当なし

学名 *Suillus viscidipes* Hongo

本種は小型のイグチ型をしたきのこである。傘の表面は肉桂色で粘性があり、凸凹状をしており、柄は細長く、早落性のつばをつける。管孔や肉等には変色性はない。本県では夏～初秋、ミズナラ雑木林内の地面に発生する（工藤ら, 1998）。

本種は日本特産とされ、分布上学的に貴重な種である。国内では北海道から滋賀県までの本州に広く分布している（工藤, 2009）が、発生環境が林相によって限定されており、発生が比較的まれなため採集例も少ない。本県では青森市の郊外で採集されたが、ミズナラ雑木林の伐採や放置によって発生環境が悪化しており、良好な里山二次林の保存が望まれる。（工藤伸一）

**ハラタケ目 イグチ科****C**

和名 アイゾメイグチ

環境省：該当なし

学名 *Gyroporus cyanescens* (Bull. :Fr.) Quel.

本種は小～中型のイグチ型をしたきのこである。傷を受けると直ちに濃紺色に変色する。傘は淡黄色でフェルト状。本県では初秋、ブナやマツなどの交じった林内の地面に発生する（工藤, 2003）。

本種は西日本で知られていたきのこであるが、近年、本県のほかに北海道からも報告されており、全国的に分布することが分かった。発生は比較的まれであり、分布上学的に貴重な種である。本県では青森市の郊外から採集されているが、現在、発生が確認されている場所はこの1か所に限定されており、発生がまれなため採集例も少ない。近年の開発による環境の変化によって絶滅が危惧されることから、環境の保存が望まれる。（工藤伸一）

**ハラタケ目 イグチ科****C**

和名 アミハナイグチ

環境省：該当なし

学名 *Boletinus cavipes* (Opat.) Kalchbr.

本種は中型のイグチ型をしたきのこである。傘および柄は黄褐色で繊維状の細鱗片に覆われる。管孔は黄色で、孔口は放射状に並ぶ。本県では、初秋、カラマツ林内の地面に発生する。

本種は発生がカラマツ林に限定されるが、比較的全国的に広く分布する。本県では青森市の郊外及び五所川原の山林から採集されているだけであるが、県内には植林されたカラマツ林が広く分布するため、本種も同じく広く分布するものと思われる。今後、引き続き詳細な県内の分布調査が必要であるが、発生環境がカラマツ林に限定されており、発生場所も限られているため、環境の変化によっては絶滅が危惧される。（工藤伸一）

**ハラタケ目 イグチ科****C**

和名 ムラサキヤマドリタケ

環境省：該当なし

学名 *Boletus violaceofuscus* Chiu

本種は中～大型のイグチ型をしたきのこである。傘、柄とも暗紫色を帯び、傘はしばしば黄色、オリーブ色、褐色などの斑紋を生じ、柄は網目模様で覆われる。本県では秋、アカマツが交じったミズナラ林のほか八甲田のブナ林に発生する。なお、八甲田に発生するものでは傘の色が淡色であり、今後分類学的検討が必要である。本県では典型的な種の発生は比較的まれである。

本種は国内のほかに中国・韓国に分布する。国内では全国的に広く発生するが、本県を含め北日本では発生は比較的まれである。本県では発生地が限定されており、ミズナラ雑木林の伐採など環境の悪化により、近年発生減少の傾向が見られることから、環境の変化によって絶滅が危惧される。（工藤伸一）

菌類

**ハラタケ目 イグチ科****C****和名** アシナガイグチ**環境省**：該当なし**学名** *Boletellus elatus* Nagasawa

本種は中型のイグチ型をしたきのこである。傘の表面は赤褐色～栗褐色で多少フェルト状をしており、柄は細長く軟毛で覆われる。本県では、初秋、アカマツの交じったミズナラなどの雑木林内の地面に発生する（工藤ら, 1998）。

本種は日本特産とされ、西日本に多く見られることから、暖温帯系のきのこと思われる。本県では青森市郊外から初めて採集されているが、その後の採集記録はない。分布上学的に貴重な種であるが、採集例が少なく詳細は不明である。本県においては発生地が限定されており、環境の変化によって絶滅が危惧される。なお、現在、分類学上オニグチ科はイグチ科に含められている。

**(工藤伸一)****ハラタケ目 ベニタケ科****C****和名** アカハツモドキ**環境省**：該当なし**学名** *Lactarius deterrimus* Gröger

本種は中～大型のカヤタケ型をしたきのこである。傘は淡橙黄色で淡青緑色を帯び、環紋は不明瞭。乳液は橙色で、空気に触れると青緑色になる。本県では、秋、エゾマツやドイツトウヒの樹下に発生する（工藤, 2004）。類似のアカハツ *L. akahatsu* Tanaka はアカマツなどの樹下に発生する。

本種は国内では本県以外には岩手県に分布することが知られているが、全国的な分布は不明である。岩手県ではドイツトウヒの樹下に発生しており、発生環境が林相によって限定される。本県では青森市の田代平高原ほか数か所から採集されているが、発生は比較的まれであり、発生環境が限定されているため、開発による環境の変化によって絶滅が危惧され、環境の保存が望まれる。

**(工藤伸一)****ヒダナシタケ目 シワタケ科****C****和名** ニカワウロコタケ**環境省**：該当なし**学名** *Gloeostereum incarnatum* S. Ito et Imai

本種は中～やや大型の多孔菌型をした膠質のきのこである。傘は半円形で短毛に覆われ淡鮭肉色。傘裏は細かいしわ状。生のときは軟らかく、乾けば収縮して軟骨状に堅くなる。本県では、秋、ハルニレやイタヤカエデの枯れ木上に発生する（工藤ら, 1998）。

本種は従来北海道だけに知られていたきのこであるが、近年、国内の亜高山地帯にも発生することが分かった（今関・本郷, 1989）。全国的に発生は比較的まれである。本県では十和田市（旧十和田湖町）の溪畔林から採集されたが、発生基質および発生環境が限定されており、発生も比較的まれであることから、環境の変化によって絶滅が危惧され、環境の保存が望まれる。（工藤伸一）

**ヒダナシタケ目 サルノコシカケ科****C****和名** タマチヨレイタケ**環境省**：該当なし**学名** *Polyporus tuberaster* Pers. :Fr.

本種は中～大型で有柄の多孔菌型をしたきのこである。傘は浅い漏斗形で圧着した淡褐色の鱗片で覆われ、傘裏は管孔状である。本県では、春～秋、ブナやミズナラの倒木や枯木上または地中の偽菌核から発生する（工藤ら, 1998）。

本種は日本のほかに北アメリカおよびヨーロッパに分布するが、発生はややまれである。本県では地中の偽菌核からまたは広葉樹の材から発生することが早くから知られていたが、ドイツの研究者によって両者は同種とされ（今関・本郷, 1989）、学術的に貴重な種である。発生地が限定されているため発生は比較的少なく、環境の変化によって絶滅が危惧され、環境の保存が望まれる。

**(工藤伸一)**

菌類

**ヒダナシタケ目 タバコウロコタケ科****C****和名 ツヤナシマンネンタケ****環境省：該当なし****学名** *Pyrroderma sendaiense* (Yasuda) Imaz.

本種は中型の多孔菌型をした有柄のきのこである。傘は腎臓形で、表面は初め全体黒褐色であるが、乾くと淡褐色となり、同一種と思われないほど変化する。傘裏は管孔状で灰白色、柄は直立性。本県では、秋、ブナの枯れ木や切り株に発生する（工藤ら, 1998）。

本種は国内では本県のほかに岩手県・宮城県・新潟県・神奈川県・鳥取県・大分県から報告がある（環境庁, 2000）が、発生は比較的まれである。本県では発生環境および発生基質が限定され、環境の変化によって絶滅が危惧される。同種の所属するツヤナシマンネンタケ属は、暫定的にサルノコシカケ科におかれていたが、近年ではタバコウロコタケ科に含まれている（工藤, 2009）。

**（工藤伸一）****ヒダナシタケ目 サルノコシカケ科****C****和名 カンバタケ****環境省：該当なし****学名** *Piptoporus betulinus* (Bull. :Fr.) Karst.

本種は大型の多孔菌型をしたきのこである。傘は腎臓形でくぼんだ位置に太くて短い柄をつけるが、ときに半円形で柄は痕跡的である。表面は淡褐色でなめし革のような感触があり、傘裏は微細な管孔状である。本県では夏～秋、ダケカンバの枯れ木または生木上に発生する（工藤, 2003）。

本種は全国的に分布し、亜高山のカバノキ林で発生が見られる（今関・本郷, 1989）。発生環境が基質等によって限定されており、発生も比較的まれである。本県では2004年に青森市の山林から採集されるまで長らく見つかっていなかった。発生基質および環境が限定されていることから今後の環境の変化によって絶滅が危惧され、環境の保存が望まれる。

**（工藤伸一）****ヒダナシタケ目 ニンギョウタケモドキ科****C****和名 ニンギョウタケ****環境省：情報不足****学名** *Albatrellus confluens* (Alb. et Schw. :Fr.) Kotl. et Pouz.

本種は大型の多孔菌型をしたきのこである。有柄で共通の根もとから肉質でクリーム色扇形の傘を多数生じ、傘裏は管孔状である。本県では、秋、アカマツ林内の地面に発生する。

本種は全国的に分布し、アカマツやキタゴヨウマツまたはしばしばモミヤトウヒなどの針葉樹に発生する（今関・本郷, 1989；工藤, 2009）。本県では発生がまれであり、2005年に大鰐町の山林から採集されるまでは長らく見つかっていなかった。発生環境が林相によって限定されているため発生が比較的まれであり、今後の環境の変化によって絶滅が危惧され、環境の保存が望まれる。

**（工藤伸一）****ヒメノガステル目 ショウロ科****C****和名 ホンショウロ****環境省：情報不足****学名** *Rhizopogon luteolus* Fr. et Nordh.

本種は小～やや中型の団子形をしたきのこで、半地中～地中生。表面は初め白色のち帯黄色で、地表に出ると黄褐色となり、傷をつけても赤く変色はしない。内部は初めから麦色で不快臭がある。本県では春および秋、クロマツの樹下に半分地中に埋もれて発生する。

本種はクロマツ林に発生する菌根性のきのこで、全国的に広く分布するが、発生は比較的まれである。本県では発生はまれであり、発生地が確認されているのは青森市郊外の1か所だけであるとされるが、その後の状態が不明であり、今後、詳細な調査が必要である。発生環境が林相によって限定されていることから、環境の変化によって絶滅が危惧され、環境の保存が望まれる。

**（工藤伸一）**

**キクラゲ目 ヒメキクラゲ科****C**

和名 ムカシオオミダレタケ

環境省：該当なし

学名 *Protodaedalea hispida* Imazeki

本種は中～大型なヒラタケ型をした無柄のきのこである。軟骨質で全体淡褐色。傘裏は粗いひだ状。傘表面は羽毛状に分枝した短毛があり、ざらつく。裏面のひだは傘と同色で厚く、放射状～迷路状に並ぶ。本県では夏～秋、ブナの立ち木や腐朽材上に発生する（工藤ら, 1998）。

本種は傘の裏がひだ状で特異な形をしているため、外見からはキクラゲ類の仲間とは思えない。また、ブナやイタヤカエデの枯幹に発生し、国内で広く分布するが発生はまれとされている（今関・本郷, 1989）。本県ではブナ林に比較的普通に見られるが、近年発生は減少傾向にある。発生地が限定されており、発生が減少してきていることから、環境の変化によっては絶滅が危惧される。

(工藤伸一)

**ズキンタケ目 キンカクキン科****C**

和名 ツバキキンカクチャワントケ

環境省：該当なし

学名 *Ciborinia camelliae* Kohn

本種は菌核から発生する小型な浅い碗形～皿形をしたきのこである。全体に淡褐色～褐色を帯び、短いあるいは長い柄をもつ。本県では、早春、ヤブツバキの樹下に発生する（工藤, 2003）。

本種はツバキの病害菌の一つで、ツバキの花びらに本菌の胞子が付着し感染すると汚く変色し、のちに落下した花の花弁は菌核化して土に埋まり、それから翌年の春に子囊盤が生じることから、発生地域はツバキ林内に限定されている。本県では平内町及び青森市の郊外から採集されているが、ツバキの自生は夏泊半島が北限であり、夏泊半島のヤブツバキに発生するものが北限とされている（工藤, 2009）。今後、開発等による環境の変化によって絶滅が危惧され、環境の保存が望まれる。

(工藤伸一)

**ズキンタケ目 ズキンタケ科****C**

和名 クチキトサカタケ

環境省：情報不足

学名 *Ascoclavulina sakaii* Y. Otani

本種は中型のとさか形をしたきのこで、塊状の共通の基部からこん棒状あるいは扁平状の突起を多数生じる。全体に灰黄緑色や灰褐色を帯び、表面は平滑もしくは微細な縦じわを生じ、肉質は弾力性があるが、膠質ではない。本県では夏～秋、ブナの倒木上に発生する（工藤ら, 1998）。

本種は1属1種からなる菌で、日本特産種とされる（今関・本郷, 1989）。ブナを特異基質とし、東北を中心とした本州のブナ帯に広く分布する（工藤, 2009）。本県では比較的普通に見られるが発生量は多くなく、発生基質および発生地が限定されているところから、環境の変化によって絶滅が危惧される。

(工藤伸一)

**チャワントケ目 ベニチャワントケ科****C**

和名 オオミノミミブサタケ

環境省：該当なし

学名 *Wynnea americana* Thaxter

本種は大型なきのこで、共通の柄からウサギの耳様のものを房状に多数生じる。内面は初め暗赤紫～褐色のち帯紫黒色、肉質は多少革質で強靱である。本県では秋、広葉樹林内の地中の黒褐色塊茎状の菌核から発生する（工藤, 2004）。

本種は春～秋、雑木林の地面に発生し、国内のほか北アメリカに分布する（今関・本郷, 1989）。北方系の菌と思われ、国内では北海道から本州に分布するが比較的まれである。本県では十和田市（旧十和田湖町）の山林から採集されているが、発生は比較的まれで、採集報告が少ないことから、発生地の環境の保存と今後の分布調査が望まれる。

(工藤伸一)

菌類



**チャワントケ目 アミガサタケ科****C**

和名 オオズキンカブリ

環境省：情報不足

学名 *Ptychoverpa bohemica* (Krombh.) Boud.

本種は中～大型な有柄で深編笠形の傘をもつきのこである。傘は釣鐘形で柄に深くかぶさり、表面に著しい縦じわがあり、褐色。柄は長円筒形で白色である。本県では早春、ブナ・ミズナラ等の雑木林内の地面に発生する（工藤ら, 1998）。

本種は子嚢胞子が通常2～4個しか形成されない特異な性質を持つ。従来北海道からしか報告がなかったが、近年、本県のほかに栃木県などからも採集されている。本県では1990年に青森市の山林から始めて採集されており（工藤ら, 1998）、その後、蟹田町から採集されているものの、ほかからの報告はない。発生場所が限られており、発生も比較的まれであるため、環境の保存が望まれる。

(工藤伸一)

**チャワントケ目 ベニチャワントケ科****C**

和名 シロキツネノサカズキ

環境省：該当なし

学名 *Microstoma floccosum* (Schw.) Raitviir

本種は小型のワイングラス形をしたきのこである。初め球形、のち頂部が開き、ついにはワイングラス形となる。内面は深紅色であるが、外面と柄は白い毛を密生する。本県では初夏、湿り気のある林内の落ち葉に半ば埋もれた落枝上に発生する（工藤ら, 1998）。

本種は全国的に分布するが、従来、類似のシロキツネノサカズキモドキ *Microstoma macrosporum* (Otani) Y. Harada et S. Kudoと混同されてきており、正確な分布は不明である。本県における採集記録は十和田市（旧十和田湖町）の山林における2例だけである（工藤ら, 1998）。発生地が限定されていることから、環境の変化によって絶滅が危惧され、環境の保存が望まれる。

(工藤伸一)

**ニクザキン目 ニクザキン科****C**

和名 カエントケ

環境省：該当なし

学名 *Podostroma cornu-damae* (Pat.) Boedijn

本種は中～大型の棒状～角状あるいは鶏のとさか状をした子座を形成するきのこである。全体赤橙色で、肉質は堅い。極めて強い毒性をもつ。本県では、夏～初秋、ブナ・ミズナラなどの広葉樹林内の地面に発生する（工藤ら, 1998）。

本種は全国的に分布するが、発生は比較的まれである。本県では1992年に旧上北町で採集されているが、その後同地区での採集記録がない。岩木山麓でも見ついているというが、詳細は不明である（工藤ら, 1998）。発生環境が林相によって限定されているため発生場所が限られ、発生も比較的まれであり、環境の変化によって絶滅が危惧されることから、環境の保存が望まれる。

(工藤伸一)

## ハラタケ目 ヒラタケ科

D

和名 カワキタケ

学名 *Panus torulosus* (Pers. :Fr.) Fr.

環境省：該当なし

本種は中～大型のヒラタケ型をしたきのこである。幼時、傘は紫褐色で臼のような形をしているが、のちヘラ状となり、黄褐色無毛平滑となる。本県では夏～秋、ブナなどの広葉樹の枯幹や切株に発生する。

本種は全国的に分布することが知られているが、発生は比較的まれである（今関・本郷, 1987）。本県における発生場所は十和田市蔦周辺が主であるが、採集報告は極めて少ない。今後、詳細な調査が必要である。（工藤伸一）

## ハラタケ目 ヌメリガサ科

D

和名 ナナイロヌメリタケ

学名 *Hygrocybe laeta* (Pers. :Fr.) Kummer

環境省：該当なし

本種は小型のヒダサカズキタケ型をしたきのこである。全体ピンク色で、傘や柄ともに粘液に覆われ、ひだの縁も粘性である。本県では、秋、スギ林内のコケ類が繁殖している草地に発生する。

全国的に分布するが、本県では2004年に十和田市（旧十和田湖町）の郊外から初めて採集された。発生は比較的まれである。環境の変化によって絶滅が危惧されるが、今後、分布等の詳細な調査が必要である。（工藤伸一）

## ハラタケ目 キシメジ科

D

和名 ホンシメジ

学名 *Lyophyllum shimeji* (Kawamura) Hongo

環境省：該当なし

本種は中～大型で厚肉なキシメジ型をしたきのこである。傘は灰褐色で、柄は太く白色。株状に生え、本県では夏～秋、ブナ・ミズナラ林またはアカマツ・ミズナラ混生林内に発生する（工藤ら, 1998）。

全国的に広く分布する。本県では開発によるミズナラ雑木林の伐採などにより良好な里山二次林が減少し、環境の悪化により発生の減少傾向が見られるが、情報不足である。今後、発生状況等の詳細な調査が必要である。（工藤伸一）

## ハラタケ目 ヒラタケ科

D

和名 ニオイカワキタケ

学名 *Panus suavissimus* (Fr.) Sing.

環境省：該当なし

本種は小型のカヤタケ型をしたきのこである。子実体はサンショウに似た特有の香りをもつ。傘の表面は卵黄色で無毛平滑である。本県では初秋、ミズナラの枯木に発生する。

本種は国内では本県のほかに、静岡県・鳥取県で発生が確認されている（今関・本郷, 1987）が、日本での発生はまれである。本県ではこれまで青森市で確認されているが、発生環境が限定されており、採集報告は極めて少ない。今後、詳細な調査が必要である。（工藤伸一）

## ハラタケ目 ヌメリガサ科

D

和名 アケボノタケ

学名 *Hygrocybe calyptriformis*

(Berk. et Br.) Fayod.

環境省：該当なし

本種は中型のクヌギタケ型をしたきのこである。傘は淡いバラ色～ライラック色で、ほとんど粘性がない。本県では、秋、林内のコケ類が繁殖しているような草地に発生する。

全国的に広く分布するが、本県では発生地が限定されており、発生は比較的まれで、1995年に十和田市から初めて確認された。環境の変化によって絶滅が危惧されるが、採集例が少なく、現在情報不足である。今後、分布等の詳細な調査が必要である。（工藤伸一）

## ハラタケ目 キシメジ科

D

和名 ヤチナラタケ

学名 *Armillaria nabsnona* Volk et Burdsall

環境省：該当なし

本種は小～中型のカヤタケ型～キシメジ型をしたきのこである。傘は黄褐色で中央が突出し、つばは消失性。本県では初秋、湿地帯の広葉樹枯幹に発生する（工藤ら, 1998）。

本種は近年、北アメリカから新種として報告された（Volk *et al.*, 1996）種である。本県においては発生地が限定されており、開発による湿地の減少等環境の悪化により、発生の減少傾向が見られ、絶滅が危惧される。今後、分布等の詳細な調査が必要である。（工藤伸一）

**ハラタケ目 キシメジ科****D**

和名 ツチヒラタケ

学名 *Hohenbuehelia geogenia* (DC. :Fr.) Sing.

環境省：該当なし

本種は小～中型のヒラタケ型～カヤタケ型をしたきのこである。傘の表面は平滑で暗黄褐色、表皮は幾分ゼラチン状。ひだに厚壁シスチジアをもつ。本県では秋、林内の草地または落葉広葉樹の腐朽木上に発生する。

本種は全国的に分布するが、発生は比較的まれである。本県においては発生地が限定されており、分布上貴重な種であるが、発生がまれで採集例が少なく情報不足である。今後、分布等の詳細な調査が必要である。

(工藤伸一)

**ハラタケ目 キシメジ科****D**

和名 ニセシジミタケ

学名 *Tectella patellaris* (Fr.) Murr.

環境省：該当なし

本種は小型のヒラタケ型をしたきのこである。傘は黄土白色～赤褐色で、柄はなく、幼時、傘の下は膜質類白色のつばに覆われる。本県では秋、ブナの枯れ枝に発生する。

本種は発生がまれで、全国的な分布状況は不明であるが、本県では1998年に十和田市蔦から初めて見ついている(工藤ら, 1999)。発生基質および発生地域が限定されており、環境の変化によって絶滅が危惧される。今後、分布等の詳細な調査が必要である。

(工藤伸一)

**ハラタケ目 キシメジ科****D**

和名 オオモミタケ

学名 *Catathelasma imperiale* (Fr.) Sing.

環境省：該当なし

本種は大型のカヤタケ型をしたきのこである。傘は黄灰褐色のち褐色～オリーブ褐色で、中央付近に不明瞭な鱗片がある。柄は太く長く、根状に伸び、柄の上部には二重のつばをつける。モミなどの針葉樹の林内に発生するとされる(今関・本郷, 1987)。

分布上貴重な種であるが、本県では過去に採集記録がある(成田, 1990)ものの、詳細が不明でその後の採集報告もない。今後、本県における分布等の詳細な調査が必要である。(工藤伸一)

(工藤伸一)

**ハラタケ目 キシメジ科****D**

和名 ヒメムキタケ

学名 *Hohenbuehelia reniformis*

(G. Meyer :Fr.) Sing.

環境省：該当なし

本種は小型のヒラタケ型をしたきのこである。傘は灰褐色で、肉に厚いゼラチン質な層をもつ。ひだは白色。本県では初夏、ブナなどの立ち枯れ木に群生する(工藤, 2004)。

本種は全国的に分布するが、子実体が小型で乾燥に弱いため発見例は少ない。本県では2003年に初めて青森市田代平で発生が確認採集されたが、発生地が限定されており、環境の変化によって絶滅が危惧される。今後、分布等の詳細な調査が必要である。

(工藤伸一)

**ハラタケ目 キシメジ科****D**

和名 ミヤマシメジ

学名 *Hydropus nigrita* (Berk. et Curt.) Sing.

環境省：該当なし

本種はやや小型の多少モリノカレバタケ型～クヌギタケ型をしたきのこである。傘は円錐状丸山形で灰褐色、柄は細い。触れると全体に黒く変色する。本県では秋に、スギの腐朽材上に発生する(工藤, 2004)。

本種は発生基質および発生環境が限定されているため、開発による環境の変化によって絶滅が危惧される。本県では十和田市内の1か所で発生が確認されているが、発生は比較的まれで、今後詳細な調査が必要である。

(工藤伸一)

**ハラタケ目 キシメジ科****D**

和名 クロキツネタケ

学名 *Laccaria nigra* Hongo

環境省：該当なし

本種は小型のモリノカレバタケ型をしたきのこである。傘は灰～帯褐灰色で、中央部はほとんど黒色、湿時周辺に条線をあらわす。本県では、初秋、草地地面に発生する。

本種は日本特産の可能性があるとされ、国内では本県のほかに、滋賀県から発生の報告がある(今関・本郷, 1987)。本県では八戸市のクリ林内から採集されているだけである。分布上貴重な種であるが、情報不足であり、今後、詳細な調査が必要である。

(工藤伸一)

## ハラタケ目 キシメジ科

D

和名 ヒメムラサキシメジ

学名 *Calocybe ionides* (Bull. :Fr.) Donk

環境省：該当なし

本種は小型のキシメジ型をしたきのこである。傘および柄は紫色を帯びる。ひだは密で白色、柄は繊維状。本県では、初秋、針葉樹樹下の地面に発生する。

本種は全国的に分布するが発生は比較的まれである。本県ではこれまで青森市と八戸市の2か所から報告がある。発生環境が限定されており、開発による環境の変化によって絶滅が危惧され環境の保存が望まれるが、情報不足である。今後、詳細な調査が必要である。(工藤伸一)

## ハラタケ目 ウラベニガサ科

D

和名 キヌオオフクロタケ

学名 *Volvariella bombycina* (Schaeff. :Fr.) Sing.

環境省：情報不足

本種は大型のウラベニガサ型をしたきのこである。傘の表面は類白色、絹糸状の毛で密に覆われ、柄の基部には黄褐色の膜質袋状の大きなつぼがある。本県では初秋、広葉樹の立ち木や枯木に発生する(成田, 1990)。

本種は全国的に分布するが、本県では発生は比較的まれである。分布上貴重な種であるが、採集例が少なく、近年では2005年に十和田市で確認されて以来、発生情報は無い。今後、分布等の詳細な調査が必要である。(工藤伸一)

## ハラタケ目 フウセンタケ科

D

和名 オオツガタケ

学名 *Cortinarius claricolor*(Fr.) Fr. var. *turmalis* (Fr.) Moser

環境省：該当なし

本種は大型のキシメジ型をしたきのこである。傘は橙褐色で粘性、周辺には白色綿毛状の被膜の名残を付着する。ツガなどの針葉樹林に発生するとされる(今関・本郷, 1987)。

本県では過去に採集記録がある(成田, 1990)ものの、詳細が不明でその後の採集報告もなく、生態は不明である。基本種にツガタケ *C. claricolor* (Fr.) Fr. があり、同種と混同されている可能性もあることから、今後、詳細な調査が必要である。

(工藤伸一)

## ハラタケ目 テングタケ科

D

和名 オニテングタケ

学名 *Amanita perpastia* Corner et Bas

環境省：該当なし

本種は大型のウラベニガサ型をしたきのこである。傘は淡黄褐色で、表面に円錐形褐色のいぼを散布する。本県における記録は県立郷土館における展示会に持ち込まれた1標本のみであり、分布は不明である。

本種は南方系のきのここと思われ、東南アジアに分布し、国内では本県以外に京都府、熊本県から知られているが、発生はまれである(今関・本郷, 1987)。本県における分布等は不明であり、今後、詳細な調査が必要である。(工藤伸一)

## ハラタケ目 ハラタケ科

D

和名 シワカラカサモドキ

学名 *Cystoderma neoamianthinum* Hongo

環境省：該当なし

本種はやや中型のウラベニガサ型をしたきのこである。傘は黄色で黄土色の粒状細鱗片を密生し、柄に幅が狭く脱落しやすいつぼをつける。本県では秋、ブナの倒木上に発生する(工藤ら, 1998)。

本種は国内で新種報告された種で(今関・本郷, 1987)、広く全国に分布すると思われる。本県では、これまで十和田市からの採集記録があるが、採集例は少なく、今後、分布等の詳細な調査が必要である。

(工藤伸一)

## ハラタケ目 ヒゲハタケ科

D

和名 コゲチャヒロハアンズタケ

学名 *Hygrophoropsis bicolor* Hongo

環境省：該当なし

本種は中型のカヤタケ型をしたきのこである。傘の表面は橙色をおびた暗褐色で、ビロード状。肉は特有のにおいがある。本県では採集場所が確認されず、生態は不明である。

本種は日本特産でアカマツの朽木上に発生するという。国内では本県のほか滋賀県で発生が確認されている(今関・本郷, 1987)。本県においては発生がまれであり、環境の変化によって絶滅が危惧されるが情報不足であり、今後、分布等の詳細な調査が必要である。

(工藤伸一)



## ハラタケ目 ペニタケ科 D

和名 アカモミタケ  
学名 *Lactarius laeticolorus* (Imai) Imazeki  
環境省：該当なし

本種は中～大型のカヤタケ型をしたきのこである。傘は橙黄色で不明瞭な環紋があり、ひだは淡橙紅色。乳液は橙朱色で空気に触れても変色しない。本県では秋、アオモリトドマツの樹下に発生する（工藤ら, 1998）。

本種はモミ属の樹下に発生し、全国的に分布する。本県では発生環境が自然林ではアオモリトドマツに限定され、環境の変化によっては絶滅が危惧される。発生が比較的まれで、今後、分布等の詳細な調査が必要である。（工藤伸一）

## ハラタケ目 イグチ科 D

和名 アカエノキンチャマイグチ  
学名 *Leccinum aurantiacum* (Bull.) S. F. Gray  
環境省：該当なし

本種は中～大型のイグチ型をしたきのこである。傘は橙茶褐色で多少綿毛状。傘の縁には垂れ下がった縁膜片がある。柄の表面は汚黄白色の地に、淡茶褐色の粒状～ささくれ状の細鱗片を密生する。本県では初夏に、ヤマナラシの樹下に発生する（工藤ら, 1998）。

本種は本県以外での分布は不明。本県での採集記録は青森市からの1例だけである。発生環境が限定されており、発生はまれで、今後、分布等の詳細な調査が必要である。（工藤伸一）

## ヒダナシタケ目 サルノコシカケ科 D

和名 エツキヒメサカズキタケ  
学名 *Calyprella capula* (Holmsk. :Pers.) Quél.  
環境省：該当なし

本種は子実体はワイングラスを伏せたようなフウリン状の極めて小型のきのこである。傘は椀状で、椀の内面、外面ともに平滑で、白色～クリーム色をしている。本県では初夏、ブナの立ち枯れ木上に群生する。

本種は発生が比較的まれで、全国的な分布は不明である。本県では2003年に青森市田代平で初めて採集された（工藤, 2005）。極めて小型のきのこで乾燥に弱いため、絶滅が危惧されるが、今後の詳細な調査が必要である。（工藤伸一）

## ハラタケ目 イグチ科 D

和名 アカジコウ  
学名 *Boletus speciosus* Frost  
環境省：該当なし

本種は大型のイグチ型をしたきのこである。傘はバラ紅色で平滑。柄は淡黄色で細かい網目に覆われる。肉には弱い青変性がある。本県では秋、アカマツの交じったミズナラ雑木林に発生する（工藤ら, 1998）。

本種は全国的に広く分布するが、本県では発生はあまり多くない。近年のミズナラ雑木林の伐採などで環境が悪化しており、減少の傾向が見られるが、情報不足であり、今後詳細な調査が必要である。（工藤伸一）

## ヒゲナシタケ目 ホウキタケ科 D

和名 ホウキタケ  
学名 *Ramaria botrytis* (Pers. :Fr.) Ricken  
環境省：該当なし

本種は中～大型のホウキタケ型をしたきのこである。全体ワイン色で、太い白色の柄から上方に枝を分け、先端は淡紅紫色のハナヤサイ状となる。本県では秋、里山のミズナラなどの雑木林に発生する（工藤ら, 1998）。

本種は全国的に広く分布する。本県では里山二次林であるミズナラ雑木林の伐採や放置による環境の悪化で発生減少の傾向が見られ絶滅が危惧されるが、情報不足であり、今後の詳細な調査が必要である。（工藤伸一）

## ヒダナシタケ目 サルノコシカケ科 D

和名 ヒトクチタケ  
学名 *Cryptoporus volvatus* (Peck) Shear  
環境省：該当なし

本種はクリの実形の小型な多孔菌型のきのこである。傘の上面は栗褐色で乾けばニス状の光沢がある。下面は白色革質の被膜を被るが、傘のつけ根付近に楕円形の小孔を開く。本県では春、アカマツの枯木上に発生する。

本種は針葉樹枯木に発生し、全国的に分布するが、本県では近年発見された種であり、侵入種の可能性がある。生態上貴重な種であるが、本県での発生はまれで採集例が少ない。今後、分布等の詳細な調査が必要である。（工藤伸一）

## ヒダナシタケ目 マンネンタケ科 D

和名 ツガノマンネンタケ

学名 *Ganoderma valesiacum* Boud.

環境省：該当なし

本種は大型の多孔菌型をしたきのこである。傘は扇形～じん臓形、表面は初め黄色、しだいに赤褐色からほぼ黒色、ニス状の光沢があり、環紋をあらわす。本県では秋に発生するが、発生場所等生態は不明である。

本種は山岳地帯や北方に多く分布し、モミ・ツガなどの針葉樹の枯木や倒木上に発生する。学術的に貴重な種であるが、本県においてはこれまで採集例がまれであり、今後、分布等の詳細な調査が必要である。(工藤伸一)

## ホコリタケ目 ホコリタケ科 D

和名 トゲホコリタケ

学名 *Bovista yasudae* Lloyd

環境省：絶滅危惧II類

本種は小型な団子形のきのこである。子実体は球形～偏球形、外皮は淡褐色で暗褐色の刺を持つが、老時脱落して円痕となる。本県における発生時期等生態は不明である。

本種は日本特産種とされ、北海道、宮城県に分布し、国の絶滅危惧種(VU)(環境省, 2007)に選定されている。発生地に本県もあげられているが、県内ではほかに確実な記録がないため発生地等の情報が不足であり、今後、分布等の詳細な調査が必要である。(工藤伸一)

## チャワソウタケ目 アミガサタケ科 D

和名 テンガイカブリ

学名 *Verpa digitaliformis* Pers. :Fr.

環境省：該当なし

本種は中型な有柄の頭部が傘状のきのこである。傘は釣鐘形で柄にかぶさるように発達する。傘の表面はほぼ平滑で、黄土褐色～褐色。柄は円筒形で中空。表面は淡黄白色でうろこ様のしわがある。本県では春、草原や雑木林内の地面に発生する(工藤ら, 1998)。

本種は全国的に広く分布するが発生は比較的まれである。本県においても発生がまれなため採集例が少なく、情報不足であるため、今後、分布等の詳細な調査が必要である。(工藤伸一)

## ヒダナシタケ目 カンゾウタケ科 D

和名 カンゾウタケ

学名 *Fistulina hepatica* Schaeff. :Fr.

環境省：該当なし

本種は大型の多孔菌型をしたきのこである。傘は舌形で、表面は暗赤褐色、微細な粒状。肉は血紅色で赤白色の筋模様を表し、血液状の赤い汁を含んで柔軟。本県では秋、広葉樹の樹幹の根際に発生する(成田, 1990)。

本種はブナ科の樹木に発生し、日本全土に分布するといわれているが、樹種は主にシイであることから温帯系のきのこと思われる。本県では発生が極めてまれで採集例が少なく、今後、分布等の詳細な調査が必要である。(工藤伸一)

## シロキクラゲ目 シロキクラゲ科 D

和名 シロキクラゲ

学名 *Tremella fuciformis* Berk.

環境省：該当なし

本種は中～やや大型な重なり合った花弁状のきのこである。子実体は樹皮の裂け目から発生し、不規則なとさか状裂片の集まりとなる。肉はやや硬いゼラチン質で全体白色。本県では初夏、ブナの枯木に発生する。

本種は温帯、熱帯地方に広く分布するきのこであるが、本県では、2002年に八甲田で初めて採集された(工藤, 2004)。分布上学的に貴重な種であるが情報不足であり、今後、分布等の詳細な調査が必要である。(工藤伸一)

## セイヨウショウロ目 イモタケ科 D

和名 イモタケ

学名 *Imaia gigantea* (Imai) Trappe et Kovács

環境省：該当なし

本種は中～やや大型なジャガイモ様のきのこである。表面は淡黄～帯褐橙色、凹凸で大小の低い疣があり粗面である。肉は堅い。本県では秋、広葉樹雑木林内の林道脇など土が露出したところの地中に発生する。

本種は日本のほかに北アメリカに分布(今関・本郷, 1989)し、国内では北海道、本州に分布する。本県でも近年発生が確認されたものの、地下生のきのこは調査が不十分であり、今後の詳細な調査が必要である。(工藤伸一)

## ③引用文献

- 本郷次雄 1974. 日本産きのこ類の研究 (21). 植物研究雑誌, 49: 294-305.
- Hongo, T. 1976. *Notulae mycologicae* (14). Mem. Shiga Univ. Nat. Sci., 25: 26.
- 環境庁 2000. 改定・日本の絶滅のおそれのある野生生物 植物Ⅱ (維管束植物以外). 自然環境研究センター. 429pp.
- 環境省 2007. 哺乳類、汽水・淡水魚類、昆虫類、貝類、植物Ⅰ及び植物Ⅱのレッドリストの見直しについて.  
(2007年8月3日公表)
- Kobayasi, Y. 1954. Sphagnicolous fungi found in Ozegahara Moor. Sci. Res. Ozegahara Moor, 558pp.
- 今関六也 1943. まひたけ属 *Grifola* S. F. Gray 東亜産さるのこしかけ科(其一). 植物研究雑誌, 19: 381-390.
- 今関六也・本郷次雄 1987. 原色日本新菌類図鑑Ⅰ. 保育社, 大阪. 325pp.
- 今関六也・本郷次雄 1989. 原色日本新菌類図鑑Ⅱ. 保育社, 大阪. 315pp.
- 工藤伸一 2005. 青森県産きのこ目録2004年版. 菌蕈研究「甲蕈塾」, 46pp.
- 工藤伸一 2000. 青森県産きのこ目録1999年版. 甲蕈塾菌蕈研究会発足記念. 菌蕈研究「甲蕈塾」, 36pp.
- 工藤伸一 2003. 菌類(キノコ・カビ)の多様性. 青森県史 自然編 生物, pp.101-144.
- 工藤伸一 2004. 日本新産種 *Hygrocybe canescens* について. 日本菌学会47回大会講演要旨集, p. 27.
- 工藤伸一 2004. 八甲田ブナ帯の高等菌類についてⅠ. 甲蕈塾研究報告, 30pp.
- 工藤伸一 2005. 青森県産きのこ目録2004年版(1999年版改訂版). 甲蕈塾菌蕈研究会発足5周年記念. 菌蕈研究「甲蕈塾」, 45pp.
- 工藤伸一 2009. 東北きのこ図鑑. 家の光協会, 東京. 272pp.
- 工藤伸一・原田幸雄・山中勝次 1999. 1998年日本菌学会採集菌類目録. 日本菌学会会報, 40: 79-83.
- 工藤伸一・長沢栄史 2003. 青森県で再発見された *Armillaria ectypa* について. 菌蕈研究所研究報告, 41: 26-34.
- 工藤伸一・長沢栄史 2008. 北日本産ヌメリガサ科菌類に関する研究 2. アカヤマタケ属の2新種およびヌメリガサ属の1新産種について. 日本菌学会52回大会講演要旨集, p. 61.
- 工藤伸一・大谷吉雄・長沢栄史 1994. 日本新産種 *Ionomidotis irregularis* (クロムラサキハナビラタケ-新称) について. 日本菌学会第38回大会講演要旨集, p. 62.
- 工藤伸一・手塚豊・米内山宏 1998. 青森のきのこ. グラフ青森, 288pp.
- Miller, O. K. Jr., J. Volk and E. Bessette 1996. A new genus, *Leucopholiota*, in the Tricholomataceae (Agaricales) to accommodate an unusual taxon. Mycologia, 88: 137-139.
- Nagasawa, E. 1995. A new poisonous species of *Boletus* from Japan. Rept. Tottori Mycol. Inst., 33: 1-6.
- Nagasawa, E. and S. A. Readhead 1988. A new edible agaric from Japan: *Clitocybula esculenta*. Rept. Tottori Mycol. Inst., 26: 1-5.
- 長沢栄史・有田郁夫 1998. *Hypsizygus ulmarius* (シロタモギタケ)および *H. marmoreus* (ブナシメジ) について. 菌蕈研究所研究報告, 26: 71-78.
- 長沢栄史・工藤伸一 1992. 日本新産種 *Creolophus cirrhatus* (フサハリタケ-新称) について. 菌蕈研究所研究報告, 30: 69-74.
- 成田伝蔵 1990. 青森県産キノコ目録. 青森県生物学会誌, 27: 1-25.
- 大谷吉雄 1982. 興味深い日本産チャワンタケ2種について. 日本菌学会会報, 23: 379-381.
- 杉山純多 2005. 菌類・細菌・ウイルスの多様性と系統. 裳華房, 東京. 492pp.
- Volk, T. J., H. H. Jr. Burdsall and M. T. Banik 1996. *Armillaria nabsnona*, a new species from Western North America. Mycologia, 88: 484-491.